

『源氏物語』の「老いしらへる」人

——反転する価値と、その逆説的有効性——

外 山 敦 子

はじめに

「老いしらふ」の「しらふ」は、何ものかに心の動きを占領されて麻痺・夢中の状態になる意の「しる」に、反復・継続の接尾語「ふ」のついた形である。つまり、老いによって心の動きが完全に支配されてしまった状態をいい、それを「年をとって正常な判断力が鈍くなる。おいはれる。もうろくする。」(角川古語大辞典¹)、「見るからに老いほうけて、わずかに昔の記憶があるような様子である。」(岩波古語辞典²)、「年を取って、もうろくする。年をとって、ほける。おいはれる。おいしれる。」(日本国語大辞典³)と説明している。

以前稿者は、女三の宮付きの老女房である「老いしらへる」人が、主要人物の隠された秘密に限りなく近づく発言をしてしまうこと⁴、無意識のうちに主要人物に揺さぶりをかけてしまう様相を論じた。

本稿では、旧稿をふまえた上で、考察の対象を『源氏物語』全体に

広げ、「老いしらへる」人が物語の進行のなかでどのようにしくみとして生かされているのかを掘り下げて検討する。その際、本稿では類似表現との比較を通して、老いの極まった状態にある「老いしらへる」人の役割の差異を明確にし、さらには、『源氏物語』前後に成立した他の物語文学に登場する「老いしらへる」人を視野に入れることで、『源氏物語』固有の機能をも抽出していく。

肉体と精神のすべてを老いに支配された、いわば老いの究極のありようを体現した「老いしらへる」人を、『源氏物語』がどのように把握し、活かしているのか。こうした「老いしらへる」人へのまなざしは、必然的に『源氏物語』にとって〈老い〉とは何か、という問いに発展していくものと考えている。

一 『源氏物語』第一部の「老いしらへる」人

『源氏物語』における「老いしらふ」の用例は、「老いしらへる

人々」(賢木卷・藤壺中宮付き老女房)、「老いしらへるどもは」(明石卷・内裏老女房)、「老いしらへる女房など」(常夏卷・弘徽殿女御付き老女房)、「老いしらへるは」(若菜上卷・朱雀院付き老女房)、「御乳母などやうの老いしらへる人々ぞ」(若菜上卷・女三の宮付き老女房)、「老いしらへる人などは」(柏木卷・女三の宮付き老女房)、「中に老いしらひて」(総角卷・宮の大夫)の、計七例である。このうち、総角卷の用例を除いた六例が女房を指し示すことばとして用いられている。「老いしらへる」人たちは、物語のなかである共通する重要な役割を担いつつ、物語の進行にしたがってその役割自体がしだいに発展・深化していく。そこで、物語第一部と第二部に登場する老女房たちを中心に、「源氏物語」における「老いしらへる」人の機能をみていくこととする。

桐壺院の一周忌を終え、光源氏は出家した藤壺のもとに年賀のため参上する。時流の変化で屋敷内はひっそりと静まり返り、部屋のしつらいも出家者の住まいに様変わりしている。光源氏は、こうした変化を目の当たりにして万感の思いを抑えきれないが、「とみにものものたまはず」[賢木・一三六頁]⁶⁾、また、ほのかに聞こえる藤壺の声に感極まって思わず涙ぐむが、周囲の目を意識しあくまでも平静を装って「言少な」[賢木・一三七頁]のまま退出する。光源氏は、藤壺へのかみ上げる感情を必死で抑制し、その結果逆に寡黙になってしまったのだ。藤壺も「思し出づること多」[賢木・一三七頁]いものの、光源氏同様、複雑な胸中は語らない。

ところが、光源氏や藤壺がお互いを思いつつも決して多くを語らないなかで、反対に多弁なのが「老いしらへる人々」であった。

「さもたぐひなくねびまさりたまふかな。心もとなきところなく世に榮え、時にあひたまひし時は、さる一つものにて、何につけてか世を思し知らむと推しはかられたまひしを、今はいといたう思ししづめて、はかなきことにつけても、ものあはれなる気色さへ添はせたまへるは、あいなう心苦しうもあるかな」
など、老いしらへる人々うち泣きつづめできこゆ。

[賢木・一三七頁]

「老いしらへる人々」は、言葉少ない光源氏の様子に以前の彼とは異なるものを感じ取り、それを逆境に直面したことによる人間的な成長と解釈して泣きながら称賛する。藤壺へのあふれる思いをひた隠し、つとめて平静を装っていたため逆に寡黙になってしまった光源氏の不自然な態度を、「老いしらへる人々」は見逃さなかったのだ。真意を悟られないよう意識的に感情を抑制していたはずなのに、「老いしらへる人々」によって、光源氏の《異変》は見破られてしまっているのである。

だが、「老いしらへる人々」は、光源氏と藤壺との秘密を知らない。したがって、藤壺に直面した光源氏の《異変》を見抜きながらも、結局はそれを光源氏の人間的成長に結びつけて解釈するよりほかなかつた。「老いしらへる人々」は、特有のするどい観察眼によって、光源氏や藤壺という主要人物の抱える複雑な背景や事情に限り

なく近づいているようでいて、やはり真相の核心部分（光源氏と藤壺の密通）にまで行き着くことはなかったのである。

このように、他の人物が沈黙を守ろうとする（場）のなかで、ひととき多弁な「老いしらへる」人の特徴を語っているのが、常夏巻の用例である。

女御の君に、「かの人参らせむ。見苦しからむことなどは、老いしらへる女房などして、つつまず言ひ教へさせたまひて御覽ぜよ。若き人々の言ぐさには、な笑はせさせたまひそ。うたてあはつけきやうなり」と、笑ひつつ聞こえたまふ。

〔常夏・二四一頁〕

近江の君の処遇に頭を悩ませる父内大臣は、異母姉にあたる弘徽殿女御に近江の君を託すことにする。内大臣は近江の君の教育係として、弘徽殿女御に仕えている「老いしらへる女房など」を指定する。内大臣の「老いしらへる女房」に対する期待は、弘徽殿女御の妹という身分血筋に遠慮することなく、近江の君の「見苦しからむこと」は「つつまず」指摘するという点にある。「老いしらへる」人は、他の人物ならば遠慮するであろう社会的身分や周囲の状況に対しても、何の配慮もなく本質的な事柄を無遠慮にことばにしてしまう。そうした「老いしらへる」人の特性は本来ならば負の要因となるべきだが、内大臣はそれを逆に近江の君の教育に有効的に利用しようとしたのである。

物語第一部に登場する「老いしらへる」人は、周囲が沈黙を守る

【源氏物語】の「老いしらへる」人（外山 敦子）

うとするなかで、ただ一人、本質に限りなく近づく発言をしてしまふ役割を果たしている。しかも、賢木巻の「老いしらへる」人は、光源氏の、真意を見抜かれまいとする意識的な行為を見破ってしまふ。「老いしらへる」人は、光源氏の抱える秘密に無意識のうちに近づいてしまふ危険人物として、物語に存在するのである。

二 「源氏物語」第二部の「老いしらへる」人

【源氏物語】第二部に登場する三例の「老いしらへる」人は、すべて女三の宮の結婚（生活）に関連する場面で登場している。主要人物の意識的な行為を見破り、主要人物の抱える秘密に近づいてしまふ物語第一部の「老いしらへる」人の役割は、第二部に展開すると、主要人物をもおびやかす存在に発展・深化するようになる。朱雀院の病により決定した女三の宮と光源氏との結婚は、薫の出産を経て女三の宮が出家することで終わりを迎えるが、実は、「老いしらへる」人が、女三の宮の結婚生活の始発と終焉に大きく関わっている。はじめに、結婚の終焉の場面からみていくことにする。

光源氏が朱雀院鍾愛の内親王を正妻に迎えて七年後、その女三の宮が柏木との密通を経て男児を出産する。出産後の盛大な儀式に人々が参集するなか、光源氏は男児出生を喜べない葛藤を胸中に押し沈め、「人にはけしき漏らさじ」〔柏木・二九八頁〕、「いとよう人目を飾り思せど」〔柏木・三〇〇頁〕と、「人（目）」を意識することに全神経を集中する。この意識的な行為により、六条院に参集し

ている人々はだれ一人として、光源氏の重苦しい胸の内に気づく者はいなかったのである。

大殿は、いとよう人目を飾り思せど、まだむつかしげにおはす

るなどを、とりわきても見たてまつりたまはずなどあれば、老

いしらへる人などは、「いでや、おろそかにもおはしますかな。

めづらしうさし出でたまへる御ありさまの、かばかりゆゆしき

までにおはしますを」とうつくしみきこゆれば、片耳に聞きた

まひて、さのみこそは思し隔つることもまさらめと恨めしう、

わが身つらくて、尻にもなりなばやの御心つきぬ。

〔柏木・三〇〇〜三〇一頁〕

ところがただ一人、女三の宮付きの老女房「老いしらへる人」が、

光源氏の行動の不審を感じ取り、生まれた赤子に対する光源氏の薄

愛を指摘してしまう。光源氏が全神経を集中して「人（目）」を意

識していたにもかかわらず、「老いしらへる人」の「目」だけがそ

こから抜け落ちてしまったのである。「老いしらへる人」の不満は

ただちに発言となつて外界に発信され、それを聞いた女三の宮は光

源氏の隔て心に絶望し、出家への衝動にかられていく。誰一人気づ

くことのなかつた光源氏の押し殺された（はずの）感情を、ただ一

人「老いしらへる人」が見破ってしまったがために、光源氏は正妻

女三の宮を永遠に失ってしまったのである。

女三の宮付きの老女房に「老いしらへる人」という呼称を使用し

ている場面は、もう一例ある。いま一つの用例を挙げ、「老いしら

へる人」の発言内容にみえる共通性を確認する。

今日は、宮の御方に昼渡りたまふ。心ことにうち化粧じたまへ

る御ありさま、今見たてまつる女房などは、まして見るかひあ

り、と思ひきこゆらんかし。御乳母などやうの老いしらへる人々

ぞ、いでや、この御ありさま一ところこそめでたけれ、めざま

しきことはありなむかし、とうちませて思ふもありけり。

〔若菜上・七三頁〕

光源氏が女三の宮を六条院に迎え入れて五日目、初めて日中に女三

の宮と対面する場面である。明るい場所での対面のため、光源氏は

入念に身だしなみを整え、一層輝きを増している。女三の宮の女房

たちは、それを「見るかひあり」と称賛するが、「老いしらへる人々」

は不安がる。女三の宮の身分不相応な幼稚さを知っている「老いし

らへる人」は、それとは不釣り合いな光源氏の立派な様子に、将来

それが因となつて「めざましきこと」が起るに違いないと、この

結婚に対して強い不安を覗かせるのである。

この「老いしらへる人々」の発言は、「来たるべき六条院の悲劇

を予告」するという意味で、「物語の筋を先取り」したものである。

だが、「六条院の悲劇」の要因は、直接的には柏木と女三の宮の密

通事件であつた。女三の宮自身は、光源氏の円熟した人柄と紫の上

の悲痛なまでの忍耐に助けられ、六条院にあつて安定した日々を得

ていたのである。その意味では「老いしらへる人々」による、「夫

婦間の不均衡からくる結婚生活の困難」という懸念は、幸運にも当

たらなかつたといえよう。にもかかわらず、結果としては密通事件を経て女三の宮は尼となり、六条院は要としての正妻喪失という打撃を被る。「老いしらへる人々」の発言は、結果として「六条院の悲劇」を予告してしまつたのである。

これら二例の「老いしらへる人」の発言に共通することは、彼女たちの発言内容が、無意識のうちに物語内世界の真相に迫つていくという点にある。しかし、そのように事の真相には迫りながら、主要人物の抱える秘密にはついに行き着くことはない。「老いしらへる人」は、正妻腹の男御子に対する光源氏の薄愛を指摘しながらも、結局密通という秘事の核心に至ることはなかつた。彼女たちは、最終的には真相の核心部分から外され、ずらされていくが、しかし図らずも真実を突き当てる発言をしてしまう存在として機能するのである。

このような「老いしらへる」人の機能は、第一部・賢木巻の「老いしらへる人」と共通している。しかし、賢木巻との決定的な相違は、「老いしらへる人」の発言を女三の宮が聞き、そのことがきっかけとなつて物語に新たな展開を呼び込んでしまつていくということであろう。「老いしらへる」人の発言は、結果として女三の宮と光源氏の結婚生活の幕引きという、極めて重要な役割を担つているのである。

こうして「老いしらへる」人は、無意識のうちに主要人物を動かしてしまつたことで、女三の宮の結婚生活を終焉に導いてしまつたが、

【源氏物語】の「老いしらへる」人（外山 敦子）

同じ現象が若菜上巻の始発にもあらわれる。寿命の短きを悟り出家を決意した朱雀院が鍾愛の内親王の処遇を憂慮し、結果として六条院への降嫁が決定するが、その過程において、実は無意識のうちに「老いしらへる」人の発言が朱雀院を突き動かしていくのである。

母女御を亡くし、後見のない女三の宮の行く末に頭を悩ませたまま、朱雀院は出家する。朱雀院は、光源氏の名代として見舞いに参上した夕霧を見て、「このもてわづらはせたまふ姫君の御後見にこれをや」「若菜上・二四頁」と考え、夕霧が最近結婚したことを話題にし、それとなくほめかして夕霧の反応をうかがおうとする。それに対して夕霧は、「さやうの筋にや」「若菜上・二五頁」と朱雀院の意図を読みとるが、臣下としての礼をわきまえ、あえてそれには答えようとしなかつた。二人は、それぞれの身分や立場をわきまえて心中を抑制し、ことばを選び、多くを語ろうとはしなかつた。結局、この話もそれ以上の進展を見せることはなかつたのである。主要人物たちがことばが少ないなかで、多弁なのはやはり女房たちであつた。

女房などは、のぞきて見きこえて、「いとありがたくも見えたまふ容貌、用意かな。あなめでた」など集まりて聞こゆるを、

老いしらへるは、「いで、さりとて、かの院のかばかりにおはせし御ありさまには、えなすらひきこえたまはざめり。いと目もあやにこそきよらにもものしたまひしか」など、言ひしるふを聞こしめして、「まことに、かれはいとさまことなりし人ぞか

し。(中略)「など、めでさせたまふ。

〔若菜上・二五―二六頁〕

朱雀院に対する夕霧の思慮ある対応や美しい容貌が女房の称賛をよぶなか、「老いしらへる」人は、光源氏の若い頃に比べたら、たとえ息子の夕霧でもかなわないと反論し、いささか無遠慮に両者が「言ひしろふ」状態へと発展していく。この場面の「老いしらへる」人の発言内容は、「昔の思い出のみがより所で、眼前の現実に対しては感受性を失っている老人の姿」⁹があらわれたものであるが、女房たちの言い争いを聞いた朱雀院は、「老いしらへる」人の意見に触発されて光源氏を称賛し、続いて「六条の大殿の、式部卿の親王のむすめ生ほしたてけむやうに、この宮を預かりてはぐくまむ人もがな」〔若菜上・二七頁〕と、本格的に女三の宮降嫁先選定に動き出す。だが、鍾愛の内親王に最上の身の振り方をと模索する朱雀院にとって、「光源氏が紫の上を育てたように」という自ら掲げた理想以上の婿がねなど存在するはずもなかった。結局朱雀院は自分自身の発した(ことば)の呪縛から解き放たれることができない。先の夕霧との会話で、心中を明確に(ことば)にしなかつたために進展せず立ち消えになった降嫁話は、朱雀院の口上により光源氏の名がはつきりと示されると、その(ことば)こそが現実を支配することになる。つまり、朱雀院が光源氏称賛を(ことば)に発したその瞬間、女三の宮の降嫁先はすでに決定していたのである。ここでは、「老いしらへる人」の発言が、朱雀院のなかに潜在していた光源氏

称賛の心理を(ことば)として顕在化の方向へと導いていく重要な役割を果たしており、またそのことで事態は大きく展開していくのである。

物語第二部に登場する「老いしらへる」人は、意図せざるところで主要人物を突き動かす発言をしてしまう。朱雀院による光源氏称賛からはじまった女三の宮の六条院降嫁と、女三の宮の出家によるその結婚生活の終焉は、いずれも「老いしらへる」人の発した(ことば)が契機になっている。女三の宮物語は、「老いしらへる」人の発言により始まり、「老いしらへる」人の発言で終焉を迎えることになるのである。

また、第一部の「老いしらへる」人は、主要人物が意識的に隠していた真意を見破ってしまうところに特徴があつたが、第二部ではさらに、本人(朱雀院)ですら気づいていない潜在的な心理をも「老いしらへる」人は暴いてしまっている。「老いしらへる」人たちは、物語の進行にしたがつてその役割を深化させていくのである。

三 「ほけ」人との共通性と差異性

『源氏物語』に登場する「老いしらへる」人たちは、主要人物の内奥を暴き真相に近づく危険な発言をする。だがこのことは、主要な辞書が「老いしらへる」の訳語として採用している「年をとって正常な判断力が鈍く」なり「もうろくする」状態であることと矛盾するかのような印象を受ける。「もうろく」した人間には、他の人で

は決して気づくことができない真相を暴く、隠れた〈力〉が存在するのだろうか。本章では、「老いしらふ」以外のことばで、「もうろくする」状態をあらわす「ほく」を例に、「老いしらふ」との共通性と差異を考えてみたい。

まず、「ほけ」人の発言が、大きな意味を持つ例として、若菜上巻の明石女御出産の場面から考えてみたい。

紫の上のもとで「后がね」として育てられた明石の姫は、春宮に入内し無事男皇子を出産した。この男皇子誕生は、光源氏一族の繁栄を後代まで保証する決定的な出来事であったが、一方、このたびの出産を六条院の栄耀栄華とは別に喜びと期待をもつて迎えていたのが、明石の御方とその両親（明石の入道、明石の尼君）であった。なかでもこれまで女御との対面を許されていなかった明石の尼君は、孫娘との対面をことのほか喜び、体調の思わしくない女御に無遠慮に近づいて、昔語りを始める始末であった。

こうした明石の尼君については、語り手によって「かの大尼君も、今はこよなきほけ人にてぞありけむかし」「若菜上・一〇四頁」と評されている。かつて、娘を手放す決心をしかねていた明石の御方に、冷静的確な判断を促した尼君は「思ひやり深き人」「薄雲・四二九頁」と評されており、比較すればその人物像の変化は明白である。

女御が春宮に入内した後、明石の御方が女御のそば近くに仕えていたが、身の程をわきまえた御方は、明石での昔話を女御に決して

語ろうとはしなかった。だが、御方が抑制し続けた肉親としての感情は、御方の代わりに「ほけ人」となり果てた尼君が喜びにまかせて長々と語り始めてしまった。身の程意識に縛られる明石の御方が言えなかったことを、「ほけ」て抑制の効かなくなった尼君が明らかにしたのである。

出産直前という場で語られる女御の出自についての昔話は、このたびの女御の出産の意味をあらためて問い直すものであった。臨月の苦しみと痛みのなかで、女御は、実の母明石の御方が光源氏も都に帰ってしまった後の明石の浦で、たった一人で女御を産み落としたりとときの不安と喜びがいかほどであったかを知ることになる。「ほけ人」は、絶ちがたい血脈の意味とその重みを体当たりで女御に突き付ける。これまでの明石一族の忍従の日々は、まさに女御による皇子出産のためだったのだ。「ほけ人」の昔語りは、女御が六条院体制の一員としてでなく、明石一族の一員として、明石一族の栄華のために出産に臨むことを要請するものだったのである。そして女御も「げに」と納得し、明石側の論理へと組み込まれていくことになる。

毫碌のために抑制が効かなくなったところで行われた語りは、明石の女御の心情を根本から揺さぶる結果になった。「ほけ」人や「おいしらへる」人のような〈毫碌した人〉は、このように暴露する者としての役割を果たす。周囲の状況や現状に対する認識や配慮に欠け、他の人たちが語らないことを臆面もなく切り出すために、彼ら

の発言が物語展開にとって大きな役割を果たしていくところには共通性がある。だが、彼らの役割には微妙な差異をもみせる。それを発言内容から確認しておきたい。

明石の尼君による昔語りは女御によつて素直に受け止められたが、ひたすら忍従と卑下の日々を送り続けてきた明石の御方によつて、このことは予定外の出来事であった。明石の御方は女御の動揺を静めようと「古代のひが言どもやはべりつらむ。よくこの世の外なるやうなるひがおぼえどもにとりませつつ、あやしき昔のことどもも出でまうで来つらむはや。夢の心地こそしはべれ」「若菜上・一〇六頁」と言う。尼君はすでに正常な判断力や記憶力を無くしてしまつた「ほけ人」であるから、「ほけ人」の語ることも「ひがおぼえ」から生じた「ひが言」で、事実とは異なると懸命に言い繕うのである。

だが、尼君の昔語りは唐突で何の脈絡もない発言であつたにせよ、その内容はすべて事実だつた。にもかかわらず、語る主体が毫碌した「ほけ人」であるがゆえに、その発言内容は事実とは異なり「ひが言」が混じるとされてしまうのである。そこには、「ほけ」人は「ひが言」を言うものである」という、ひとつの共通理解が存在する。

このように「ほけ」人が「ひが言」を言うパターンは、他の場面にもみられる。

むすめたち、さは言へど、心強く笑ひて、「この人のさま異に

ものしたまふを。ひき違へはべらば、思はれむを、なほほけほけしき人の、神かけて聞こえひがめたまふなめりや」と解き聞かす。〔玉鬘・九八頁〕

西の京の乳母（夕顔の乳母）に伴われて筑紫に下向した玉鬘は、かの地で美しく成長し、やがて肥後の有力者である大夫監に求婚される。大夫監は自ら西の京の乳母のもとを訪れ、玉鬘との結婚をせまらるが、乳母の機転によつて何とかその場を切り抜けることに成功する。ところが帰り際、監の詠みかけてきた和歌に対する乳母の返歌が、監の機嫌を損ねてしまう。恐ろしさのあまり声もでなくなつた乳母に代わり、娘たちが必死に弁解する。この時の乳母の返歌「年を経ていのる心のたがひなば鏡の神をつらしとや見む」〔玉鬘・九八頁〕は、長年にわたつて祈つてきた玉鬘の幸福がもしも叶わなかつたら、「かがみの神」を恨むという、乳母の正直な気持ちが込められている。その和歌を娘たちは「母は毫碌しているために、言い間違いをした」と弁解し、監の機嫌を取ろうとする。ここで、乳母は決して言い間違いをしたわけではない。だが、間違いだと言わねば監の機嫌は直らない。では、なぜこのような間違いをしたのか、その弁解のために、乳母は正常であるにもかかわらず、娘たちによつて「ほけほけしき人」に仕立て上げられてしまうのだ。監も、娘たちの弁解に「おい、然り、然り」〔玉鬘・九八頁〕と納得する。ここにも、「ほけほけしき人」が「ひが言」を言うのは仕方がないという共通理解がある。そして、乳母は正直な気持ちを表現したにも

かわらず、発話主体が「ほけほけしき人」とされると、たちまちその内容も真実から「ひが言」にされてしまうのである。

これは、源氏の御族にも離れたまへりし後大殿わたりにありける悪御達の落ちとまり残れるが問はず語りしおきたるは、紫のゆかりにも似ざめれど、かの女どもの言ひけるは、「源氏の御末々にひが事どものまじりて聞こゆるは、我よりも年の数つもりほけたりける人のひが言にや」などあやしがりける、いづれかはまことならむ。

〔竹河・五九頁〕

引用本文は、竹河巻冒頭のいわゆる草子地である。光源氏一族とは疎遠になってしまった「悪御達」が語る竹河巻であるが、その内容は「紫のゆかり」の人々による語りと相違があるという。一体どちらが正しいのか、それは分からないと物語執筆者は前置きする。

「悪御達」は、自分たちの提供する情報の方が正しいと主張し、「紫のゆかり」の情報には「ひが事」が混じっていると指摘する。その理由として、「紫のゆかり」が「我よりも年の数つもりほけたりける人」であるからだと説明するのである。「悪御達」は、自分たちの語りの正当性を主張するために（換言すれば「紫のゆかり」の情報には信憑性がないことを主張するために）、「紫のゆかり」の人々を「ほけたりける人」に仕立て上げることで、彼女たちの語りから信頼性を削ぎ落とそうとする。そして自らの「問はず語り」の正当性を主張しようとするのである。ここでも、自分たちが見聞した内容を忠実に語っていたはずの「紫のゆかり」の語り手たちは、

〔源氏物語〕の「老いしらへる」人（外山 敦子）

「ほけたりける人」とされたことによって、その発言内容がたちまち「ひが言」とされてしまう様相がみてとれよう。

以上三例に共通することは、発話者は事実を述べているにもかかわらず、第三者がその内容を隠蔽・排除するために、発話者を「ほけ」人に仕立て上げることで発話内容を「ひが言」と断定している点である。この点については、先にみた「老いしらへる」人との差異を明確にあらわしている。「老いしらへる」人は、主要人物の秘事に接近しつつも微妙にそこからずらされていき、しかし図らずも真実を突き当ててしまう役割を担っていたが、「ほけ」人は、事実を述べているにもかかわらず、正常な判断力を失った人物の発言という理由から、第三者によって「ひが言」と退けられてしまうのである。また、「ほけ」人の語る内容は、自分の正直な気持ちや自己の体験談など、いわば〈自己語り〉に終始しているが、「老いしらへる」人の場合は、徹底して他者を〈見る人〉であり、その発言は〈他者批評〉である点を比較しても対照的であるといえるだろう。

四 『源氏物語』前後の「老いしらへる」人

これまで「源氏物語」に登場する「老いしらへる」人の役割を類似表現との対比によって明らかにしてきたが、他の作品の「おいらふ」の用例も、「源氏物語」と同様の役割を果たしているのだろうか。本章では、「源氏物語」前後に成立した物語文学にあらわれる「老いしる」、「老いしらふ」の用例とその役割を概観する。「源

氏物語」前後に成立した物語文学にあらわれる「老いしる」、「老いしらふ」の用例数は、『うつほ物語』一例、『とりかへばや物語』一例、『浜松中納言物語』二例である。¹²⁾

(1) 『うつほ物語』

「さや、よくのたまへり。このごろは、願はしきものなり。殿には人いと多かれども、われらが友達にすべき人もなし。乳母たちも、若くとてある限りぞある。われのみ貧しくて老いしれにたるや」といふ。¹³⁾

「年六十ばかり」〔藤原の君・一八一頁〕の滋野真菅は、あて宮を妻にと望み、近所に住む姫を介してあて宮の兄忠澄の老乳母に仲介を頼む場面である。相談を持ちかける姫に、老乳母は「三条殿には大勢伺候しているが、皆若く、自分だけが『老いしれ』ている」と、自分が三条殿では相手にされない存在であることを嘆く。老乳母は仲介を引き受けるものの、あて宮への文の取り次ぎすらうまくいかず、真菅の求婚は失敗に終わる。六十歳の老人の求婚を二人の老人が仲介したわけだが、大勢の若者によって繰り広げられるあて宮への求婚に、真菅のような老人が参加している滑稽さを、仲介者である姫や老乳母の存在がより強調しているといえよう。

(2) 『とりかへばや物語』

我はかならずしも急ぎ出づべきならねど、姫君にしばしもたち離れきこえてはいとよりどころなき心地すべきもさるることにて、宮も、やがてついでに渡したてまつりて、我は一筋に思ひおく

ことなくと思して、さるべき老いしらへる女房などをだにとどめたまはず、出だしたてさせたまふ。〔巻第四・四六三頁〕¹⁴⁾

吉野の姉妹が、今大将によって京の新邸に迎えられる場面。本来ならば、新邸で姉妹に仕えさせるには見劣りする「老いしらへる女房」などは吉野に留めおくべきだが、父である吉野の宮は修行専心を願う気持ちから、「老いしらへる女房」を含む姉妹付きの女房すべてを京に行かせた。「老いしらへる女房」の上京は、吉野の宮の仏道修行に対する固い決意を強調する役割を果たしている。

(3) 『浜松中納言物語』

奥の方より、老い痴らへたる声したる人出で来て、「ただ今ぞ渡り給ひにける。(中略) あはれあさましや。目の前に、さは、かかることもありけるは」と言ひつづけて、泣くさまのいみじきは、御乳母などやうの人なるべし。

〔巻第三・二五二―二五三頁〕¹⁵⁾

衛門督と大貳の娘との婚儀の日、中納言が衛門督の元北の方の邸内を覗く場面。元北の方の乳母が「老い痴らへたる声」で衛門督の薄情な仕打ちをあれこれと非難し泣き騒ぐのに対して、元北の方は「言ふにもよらぬものなり」〔巻第三・二五三頁〕と、悲しみを胸の内秘め多くを語らない。そうした元北の方の「あてやか」〔巻第三・二五三頁〕な様子を見て、中納言は男の心変わりを情けなく思い、元北の方に対して心から同情する。老乳母の発言は女主人である元北の方の気持ちを代弁したものだ、老乳母の多弁が、反対に言葉

少なく逆境を耐え抜こうとしている元北の方の高貴さを際立たせる役割を果たしている。

(4) 『浜松中納言物語』

今日はよろしくと見よるこびつる人々、このしなの上にはほり給ひぬるうれしさもおぼえず泣きまどふを、中納言はしばし庭におりて、縁におしかかりて、(中略)うちには姫君、絶え入りたまひぬ。(中略)ものもおぼえず寄り来て、「いかがしはべらむずる」と、老い痴らへる人のうれへまどふ、いみじとおほしまどふ心まよひに、ものせさせ給ふならむ。

〔巻第四・二九六頁〕

吉野の尼君は、中納言に姫君を託して亡くなる。尼君の死に加えて、心を乱した姫君までもが失神し、「老い痴らへる人」は途方にくれた様子でうろたえる。諸事にしつかり対応できる確かな女房がいないので、結局中納言が自ら几帳の内に入って姫君の介抱をする。姫君が中納言に姿を残りなく見られてしまったのは、姫君に「老い痴らへる人」のような役に立たない女房しか仕えていなかったためである。

『源氏物語』以外の物語文学に登場する「老いしらふ」はすべて乳母や女房に使われているが、主に彼女たちの思慮の浅さや短絡的思考、適切な判断力の喪失を表しており、もはや女房としては役に立たないとされる場合が多い。また(3)のように、「老いしらへる」乳母と女主人とを対比させることによって、女主人の高貴さや奥ゆ

『源氏物語』の「老いしらへる」人(外山 敦子)

かしさを際立たせる役割をも担っている。以上の例から、『源氏物語』以外の物語文学の「老いしらふ」は、否定的な要素が極めて強いと考えられる。老衰・老耄という負の役割を「老いしらへる」女房たちが担うことによって、若い主要人物たちを引き立てているのである。

五 『源氏物語』の〈老い〉

他作品に登場する「老いしらへる」人の役割は、『源氏物語』に登場する「老いしらへる」人のそれと比較したとき、明らかな差が認められる。なぜ、『源氏物語』の「老いしらへる」人のみ、他の物語文学にはない固有の役割が担わされるのか。この問いは、突き詰めれば、『源氏物語』が〈老い〉をどのようなものと捉えているのかという極めて大きな問題へと連動していくものでもあるだろう。

「老いしらふ」とは、肉体や精神のすべてを〈老い〉に支配されるという意である。〈老い〉はもともと物語世界では厳しい異質性や疎外性を有する負の存在であり、〈老い〉の究極のありようを体現した「老いしらへる」人は、老衰・老耄の極みという否定的役割が担わされる。その具体例が、前章で取りあげた『うつほ物語』と「かへばや物語」『浜松中納言物語』の各場面に登場する「老いしらへる」人たちだといえよう。だが、『源氏物語』の「老いしらへる」人には「正常な判断力が鈍った」「耄碌」という負の要素を見

四九

出すことができない。そのことをどのように説明すべきなのだろうか。

『源氏物語』の「老いしらへる」人が登場している場面には、それぞれが身分・立場などによる制約や、思うにまかせない事情を抱え、表現を抑圧された主要人物たちがいる。彼らは、社会的なしがらみや制約のなかで本質的なことは何も語ろうとしない。その一方で、「老いしらへる」人たちにはそうした抑止力など一切なかった。周囲の状況や現状に対する配慮に欠け、思ったことは率直に語り出してしまふ。こうした配慮の欠如は、たしかに「正常な判断力」の低下によるものである。しかし、あらゆる先入観や人間関係のしがらみから解き放たれ、曇りのない〈目〉で対象と向き合ったときにこそ、はじめて人は本来持つている直感で、物事の本質を見定めることができるのではないだろうか。つまり「老いしらへる」人は、物語内社会の構成員としての「正常な判断力」を喪失したことにより、逆に社会的属性という鎧を脱ぎ捨てた素の人間としての「正常な判断力」＝直感力を発動することができるのである。

そして重要なのは、物語内社会の秩序からは疎外され、否定された存在としての無効性を、逆に物語展開を呼び込む〈力〉に転じていく、『源氏物語』の手法である。『源氏物語』の「老いしらへる」人に対する固有の価値認識は、『源氏物語』の〈老い〉に対する価値認識に連動するものとして理解できよう。〈老い〉は、時間を集積した存在であることから、伝承世界においては必然的にその経験

に伴う精神的な老熟という肯定的な価値が強調され、神的な權威ある存在として位置づけられてきた¹⁷⁾。その一方で〈老い〉を權威付けするはずの時間的集積には、老衰・老耄という無価値・無効性が背合わせになつて存在している。注意すべきは、『源氏物語』の語る〈老い〉の逆説的有効性が、右のような老人の精神的老熟という肯定的価値としての一義的な有効性とは全く異なるものであるということである。無論、他の物語文学に登場する〈老い〉のように、無効性のみが強調されているわけでもない。あくまでも老いのたわごとにすぎないとされる発言が、その価値を一転させ、物語を一気に展開させてしまうところに、〈老い〉に対する『源氏物語』固有の価値観が存在する。『源氏物語』は〈老い〉が物語内社会において無効であることを、逆に〈方法〉として有効に活かしているのである。

注

- (1) 中村幸彦他編『角川古語大辞典』（角川書店）。
- (2) 大野晋他編『岩波古語辞典 補訂版』（岩波書店）。
- (3) 『日本国語大辞典 第二版』（小学館）。
- (4) 「女三の宮物語の始発と終焉—変貌する老女房—」（『古代文学研究 第二次』第七号 一九九八年一〇月）。
- (5) 本稿では、物語第一部・第二部に登場する「老いしらへる」人たちの発言を中心に考察するため、発言のない明石巻の用例と、第

三部である総角巻の用例については用例を挙げるだけに留めることにする。

- (6) 『源氏物語』の引用は、すべて新編日本古典文学全集『源氏物語』(小学館)に拠る。なお引用本文には私に傍線等を付し、下に巻名と頁数を記した。

- (7) 『新編日本古典文学全集 源氏物語 四』(小学館) 頭注、七三頁。

- (8) 永井和子「物語と老い―源氏物語をひらくもの」(『国語と国文学』第七一巻第一号 一九九四年一月)、後に同氏著『源氏物語と老い』(笠間書院 一九九五年五月)に所収。

- (9) 『新編日本古典文学全集 源氏物語 四』(小学館) 頭注、二五頁。

- (10) 三田村雅子「明石からの手紙」(『源氏物語―物語空間を読む』ちくま書房 一九九七年一月)。

- (11) 永井和子は「物語と老い―源氏物語をひらくもの―」(『源氏物語と老い』 笠間書院 一九九五年五月)において、「ほく」ということばを「一種の放心状態をさす語」とした上で、「放心のままだはなく必ずそれが何らかの表現力を持つものとして描写されている」と説明する。また、「老いしらふ」との比較を通して、「ほく」は「人目から解放され、抑制を失い「老いしらふ」状態よりも更に激しく突き動かされた発言・行為に連なることが多い」と結論付けている。しかし、本論文でそれぞれの発言内容を考察した結果、「ほけ」人よりもむしろ「おいしらへる」人の方が、物語展開における発言の重要度や衝撃性は大きいと考える。

- (12) 『うつほ物語』、『とりかへばや物語』、『浜松中納言物語』のほか、以下の作品について用例を調べた。『竹取物語』、『落窪物語』、『伊

源氏物語』の「老いしらへる」人(外山 敦子)

勢物語』、『大和物語』、『平中物語』、『多武峰少将物語』、『夜の寝覚』、『堤中納言物語』、『松浦宮物語』、『狭衣物語』。これらの作品については、「老いしらふ」の用例は確認できなかった。

- (13) 引用は、新編日本古典文学全集『うつほ物語』(小学館)に拠る。なお引用本文には私に傍線等を付し、下に巻名と頁数を記した。

- (14) 引用は、新編日本古典文学全集『とりかへばや物語』(小学館)に拠る。なお引用本文には私に傍線等を付し、下に巻数と頁数を記した。

- (15) 引用は、新編日本古典文学全集『浜松中納言物語』(小学館)に拠る。なお引用本文には私に傍線等を付し、下に巻数と頁数を記した。

- (16) 永井和子「老いということば―源氏物語の場合」(『学習院女子短期大学国語国文論集』第二〇号 一九九一年三月)、後に同氏著『源氏物語と老い』(笠間書院 一九九五年五月)に所収。

- (17) 宮田登「伝統社会における『老い』」(『老人と子供の民俗学』白水社 一九九六年三月)、山田直巳「記紀・風土記の『老』―知の枠組みと時の詩学―」(『古代中世文学論考 第三集』 新典社 一九九九年一〇月)など。

(博士後期課程五年)